温故知新④

私が建築から造園設計の仲間に入れてもらった頃、関西では日本を代表する造園家として、荒木先生、井上(卓)先生、中根先生の御三家がおられ、海外でも意欲的に活躍し、日本の伝統文化である作庭を実践されていた。

1970年の大阪万博の頃には次世代の御三家、藤田、井上(芳)、大塚さん達が20代の後半で既に独立して新進気鋭の造園家として光を放っていた。

仕事は現在のように幅広く多様な仕事が溢れていたわけではなく、住宅公団の外構設計（当時、園地設計と呼んでいた）や公園・緑地、大阪府・市・神戸市などの公園や街路が主体であった。

日本造園設計事務所連合から日本造園コンサルタント協会、ランドスケープコンサルタント協会と組織は変革しながら個人も事務所も技術を磨き、実践を積み重ね、世界に発信できる専門家・職能集団として今日のランドスケープ界を築き上げた。

31歳の時、当時35万円程の借金をして、日本造園コンサルタントの第１回海外研修でアメリカのランドスケープデザインに参画した。サンフランシスコの青い空、レンガ工場を改造したようなローレンス ハルプリンの事務所を訪ねた。

ヒゲにジーンズ、首にはネックレスが光っていた。「ようこそ。貴方たちの日本とは太平洋を挟んだ友人ですね。共にランドスケープデザイナーとして良い仕事をしましょう」と 笑顔で迎えてくれた。
その頃はランドスケープでいくか、建築でいくか、迷っていた時でもあり、ハルプリンとの会話と“ルーズベルトメモリアルパーク”の美しくダイナミックなスケッチや模型を見て、本気でランドスケープデザインをやろうと決めた。

ランドスケープデザインは「土地と人間と自然との良い関係をつくり、他人を幸福にする技術と職能」である。

時代や状況がどんなに変わろうと、ランドスケープデザインする時、単に与えられて仕事を業務でこなすのではなく、自ら創ることに夢を語り、常に向上心を持ち、誰にもない自分を創造し、外へ力強くメッセージをすることが大事である。

経験から本当に良い仕事が出来ると感じたのは40代後半に入ってからである。時間はいっぱいあります。

長谷川　弘直／ＲＬＡ登録ランドスケープアーキテクト
1975年　株式会社　都市環境計画研究所設立
主な仕事：奈良万葉文化館の庭、岐阜国際会議場・ホテルの庭
キャナルタウン兵庫（2002年　グッドデザイン賞）
市民や住民参加でつくる「東条ゆめのくに公園」（2004年　日本公園緑地協会賞）
都市環境デザイン会議代表幹事
大阪大学・美作大学・京都造形芸術大学
兵庫県立淡路景観園芸学校　非常勤講師